

プロジェクト名	標準教職能力テストの開発		
プロジェクト期間	平成 22 年度～平成 23 年度		
申請代表者 (所属講座等)	大坪靖直 (教育心理学講座)	共同研究者 (所属講座等)	松尾剛 (教育心理学講座) 堺正之 (学校教育講座) 川口俊明 (学校教育講座)

平成 22 年度は、教員採用試験で頻繁に出題される教育心理学に関する約 160 個のキーワードを抽出し、項目反応理論に基づいた模擬試験プログラムを作成した。

平成 23 年度は、取り上げる問題領域を教職に関する問題にまで拡張し、約 500 問からなる教員採用試験模擬プログラム(STAT)を作成した (図 1 参照)。

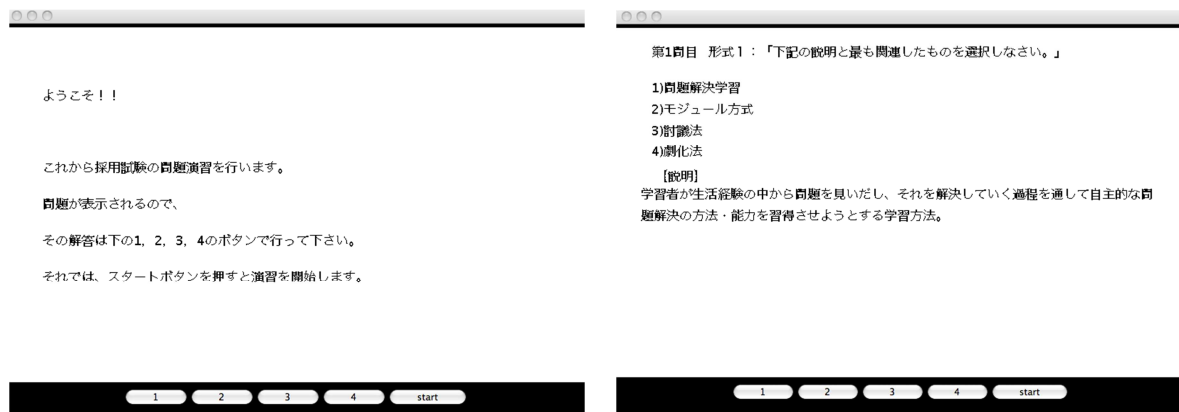


図 1 STAT の初期画面と問題出題画面例

作成した模擬試験プログラム (Java 言語) は、平成 24 年 5 月より就職支援室にて希望者全員に USB メモリーで配布を開始した。(最大 900 人)

本模擬試験プログラムは項目反応理論に基づいて作成しているので、利用者は現在の能力水準に最適化された問題に解答し (図 2 参照)、異なる問題に解答したとしても絶対基準の能力スコアの推定値が算出される。したがって、教員採用試験の勉強が進めば進むほど、より高い能力スコアの推定値になっていることを自分自身で確認することができ、試験勉強への動機づけを促すことが期待される。

項目反応理論は、英語能力を測定する代表的なテストである TOEFL や TOEIC で採用されており、教育評価を始め多くの測定に係る分野で注目を集めている理論である (このほかに、米国における大学入試センター試験に相当する SAT や、国際学力比較調査の PISA や TIMSS でも利用されている)。この理論を用いて作られたテストは、次のような特徴を持っている。

(1) “項目プール” と呼ばれる問題群に属する問題を出題することにより、テストの実施時期・問題が異なる場合であっても比較可能な、標準化された能力スコアを算出することができる。

(2) コンピュータによる試験との親和性が高く、従来のテストに比べてテストに要する時間が大幅に短縮される。さらに、受験者は自らの能力スコアを試験後すぐに知ることができる。

項目反応理論を利用したテストを作成することの利点は、次の 4 点に集約することができる。

第 1 に、標準化された能力スコアを推定することにより、同一個人の能力の伸びや、異なる学

年の能力の違いを診断し、各科目で習得した知識と技術が履修後にどのように維持・向上しているのかを明らかにすることができる。

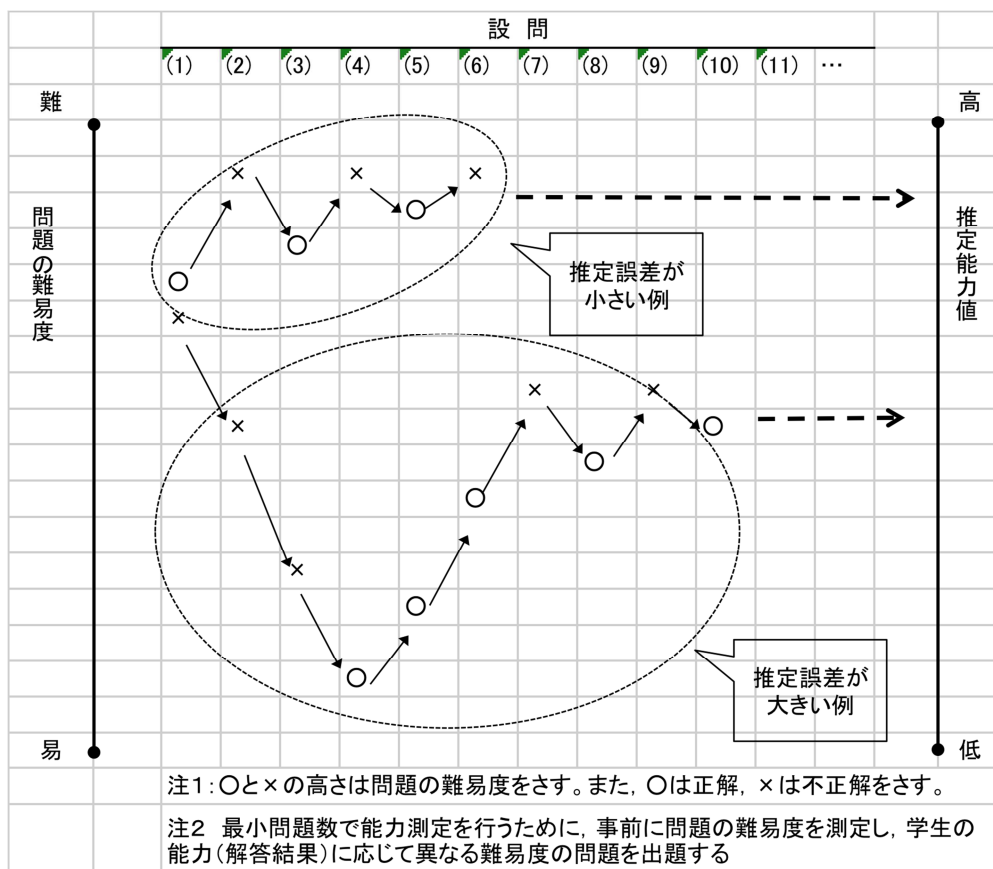


図2 項目反応理論に基づく最適化された問題の出題イメージ

第2に、一定期間ごとに学生のテスト結果を回収し、学期ごとに学生の能力スコアの推移や設問ごとの正答率の推移を集計することで、科目履修中から卒業時点までの学生の能力水準に関する情報を得ることができる。これは、学生の教職能力の水準を、客観的に評価・把握する上で非常に重要である。

第3に、学生の教職能力水準の客観的データを収集することで、教職実践演習のより有効な運営と、教員採用試験対策講座の内容充実を図ることができる。その結果、教員や年度によって異なっていた評価水準を等質化し、全学共通の評価基準を再構築することが可能になる。

第4に、オフラインでコンピュータを用いた試験環境を提供することで、学生は当該科目の履修中でも履修後でも、随時パソコンを起動してテストを受けることが可能になる。このテストは、10分程度で容易に解答することが可能である上、学生は現時点での自身の客観的な能力スコアとその変化を、試験実施後すぐに知ることができる。このことにより、学生は自ら学習計画を立て、進んで教職能力向上を目指すことができるようになる。

このように、項目反応理論に基づくテストは本学の抱える評価に関する課題を解決し、カリキュラム内容を見直すための基盤となる情報を提供することもできる。さらに、学生本人に、自身の能力スコアに関する情報を、即座に利用可能な状態で提供することで、学生の自主的な教職能力向上を促すことができる。

